

学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント 創出プロジェクトの成果と課題 (2)

ウォント盛香織・岩崎佳孝
木下裕美子・中岡妙子

Creation of Intradepartmental/Intrainstitutional Students-Centered Academic Events: Its Achievements and Problems (2)

WANT Mori Kaori, IWASAKI Yoshitaka, KINOSHITA Yumiko and NAKAOKA Taeko

Abstract: This report discusses the achievements and problems of the students-centered academic event titled “Minority Women in North America: Indigenous Women and Japanese War Brides.” We will assess what students learnt from the event through the analysis of two surveys we conducted before and after the event, and examine what kind of educational impacts students gained by participating in the event.

Key Words: Plan and Practice of students-centered academic event; Creation of Intradepartmental/Intrainstitutional project; research on minority women in North America; gender education; multicultural education

要旨: 本報告は、2019年度甲南女子大学教育イノベーション・プロジェクトに採択された「学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント創出プロジェクト」で行った「北米に生きるマイノリティ女性たち：先住民女性、そして日本人花嫁」というアカデミック・イベント開催時、ならびに開催後の、プロジェクト参加各ゼミでの学生の学習成果について、イベント前後で実施したアンケートの分析を説明し、その学習成果ならびに今後の課題を述べたものである。

キーワード: 学生主体のアカデミック・イベントの企画と実践、学科・組織横断型事業、北米マイノリティ女性研究、ジェンダー・多文化教育

研究の背景と目的

本報告は、2019年度甲南女子大学教育イノベーション・プロジェクトに採択された「学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント創出プロジェクト」の取り組みの成果ならびに課題について述べた2回目の報告である。

報告(1)と重複するが、「学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント創出プロジェクト」の学習プロジェクトとしての目的を確認する。一点目の学習目的は、学生が主体となり、アカデミック・イベントを企画、実施することで、学生の学びの理解や関心を深めることである。二点目は、本プロジェクトを通じて、学生が女性大学で学ぶ学生として、北米に生きる女性たちの生き方を知ることで、ジェンダー・多文化意識を高め、国際的な視野を獲得することを目指した点である。三点目は、本プロジェクトは学生が図書館職員や教員、そしてシンポジウムのゲストスピーカー等と協働して実践することで、複雑なネットワークの中で、マネジメント

スキル並びに自律性を磨く点である。四点目は、教員主導の座学では経験できない積極的な学びを学生が経験し、困難なタスクをやりきることで、自らの成長を実感できる点である。

10月21日から26日にかけて図書展を実施し、岩崎・木下・ウォント盛ゼミの学生が準備した北米先住民女性や日本人戦争花嫁に関する英語原文の翻訳や、フランスの女性を対象にしたエンパワメントに関する報告書、ポスターを展示し、205名の方にご来館頂いた。10月26日のシンポジウムには、北米先住民メイティ女性の活動家で研究者でもあるカナダのゲルフ大学キム・アンダーソン博士による基調講演と学生発表等を行い、107名の参加があった。ワークショップでは、北米先住民メイティのジグ・ダンスを、メイティ女性の舞踏家であるイヴォンヌ・シャトランド氏に24名の学生や外部参加者を対象に実施していただいた。なお前日にはプロジェクトに協賛をいただいた在日カナダ大使館から参事官マット・フレーザー氏が来学いただき、アンダーソン、シャトランド両氏と共に森田勝昭学長を表敬訪問し、歓談するとともに、学長の案内による図書展見学も行われた。全体として、多くの方々に学生の取り組みを見て頂くことができた。

プロジェクトに関する第二回目の報告では、アカデミック・イベント後の学生の学習成果を、イベント前後で行ったアンケートをエビデンスとして分析し、量的分析の観点から述べていく。また、各ゼミでのプロジェクト・マネジメント全体としての成果と課題についても述べる。

イベント前後での学生の学習効果に関するアンケート分析¹

3ゼミでは、プロジェクト開始の4月に、以下の質問を学生に対して事前アンケートとして実施した。

表1 事前アンケートの質問項目

質問 1.	あなたが北米（カナダ・アメリカ）に住む人々に関して持つイメージを自由に下に記述してください。
質問 2.	あなたはマイノリティという言葉・概念を知っていますか？ 知っている・知らない *知っている場合は、知っている内容を簡単に下に記述してください。
質問 3.	あなたはエンパワメントという言葉・概念を知っていますか？ 知っている・知らない *知っている場合は、知っている内容を簡単に下に記述してください。
質問 4.	あなたは北米先住民を知っていますか？ 知っている・知らない *知っている場合は、知っている内容を簡単に下に記述してください。
質問 5.	あなたは日本人戦争花嫁という言葉もしくは存在を知っていますか？ 知っている・知らない *知っている場合は、知っている内容を簡単に下に記述してください。

これらの問いに、全体で106名（内訳 英文学生52名；多文化学生52名；1年生60名；3年生31名；4年生25名）の学生が答えた。質問1に関しては、陽気、自由といった肯定的な意見が多かった一方、銃社会、移民といった社会背景を指摘した学生もいた。質問2に関しては、専門的な学びの始まっていない1,3年生に関しては、知らないと答えた学生が圧倒的に多かったが、4年生は卒業論文に着手しており、マイノリティ問題を扱うゼミに所属していることから、知っていると答えた学生が半数を超えた。割合としては、知っている35%、知らないが65%であった。質問3に関しては、106名中2名のみが知っているという結果であった。エンパワメントは、社会的弱者が力を得ることを意味し、マイノリティ研究に必須の概念であるが、多くの学生には難解な概念であったことがわかる。質問4と5に関しては、それぞれ知っている学生は11%、10%と、どちらも低かった。

以上のことから、事前アンケートを取った時点では、学生の北米マイノリティや女性問題に関する知識や関心

1 アンケート集計は、木下ゼミ4年生の林美紅さん（2016年度生）と3年生の山口愛理さん（2017年度生）が分担して行ってくれました。ここにお礼を申し上げます。

が低いことがわかった。学生の意識はイベント実施後どのように変容したのだろうか。次に、1月に実施した事後アンケートの結果について見ていく。

事後アンケートは、事前アンケートの質問に呼応する間並びに、イベント参加後の学生の心境について尋ねる問いも加えた。以下が事後アンケートの内容である。

表2 事後アンケートの質問項目

質問 1.	北米（カナダ・アメリカ）に住む人々に関して持つ理解は深まりましたか。 4. とても深まった 3. 深まった 2. すこし深まった 1. まったく深まらなかった
質問 2.	マイノリティという言葉・概念に関して持つ理解は深まりましたか。 4. とても深まった 3. 深まった 2. すこし深まった 1. まったく深まらなかった
質問 3.	エンパワーメントという言葉・概念に関して持つ理解は深まりましたか。 4. とても深まった 3. 深まった 2. すこし深まった 1. まったく深まらなかった
質問 4.	北米先住民に関して持つ理解は深まりましたか。 4. とても深まった 3. 深まった 2. すこし深まった 1. まったく深まらなかった
質問 5.	日本人戦争花嫁という言葉もしくは存在に関して持つ理解は深まりましたか。 4. とても深まった 3. 深まった 2. すこし深まった 1. まったく深まらなかった
質問 6.	各種イベント（図書展、シンポジウム、ワークショップ）に参加した上で、自分の参加方法や内容を説明し、それを通じて考えたことや思ったこと等、皆さんの意見を下記欄に自由に記述してください。

これらの問いに、全体で101名（内訳 英文学生55名；多文化学生46名；1年生49名；3年生33名；4年生19名）の学生が答えた。質問1～5にかけて、少し深まった～とても深まった、含めると、すべての項目で90%を超えた。このことから、学生がイベントを通じて、学習内容に関心を持ったことがわかる。さらに関心がどのように知識になったかについては、学生の問い6への記述から推察できる。例えば、岩崎ゼミ3年生は「実際にメイティと交流したことで、彼等の文化をもっと知りたいと思った」、「パネルの作成やイベントでの手伝い、サポートを通じて、マイノリティや女性、先住民や歴史といったものへの考え方が深まりました」という意見が上がった。木下ゼミ1年生は「全くかかわりがなかった戦争花嫁について、自分自身にも関係のない話でないと思いました。同じ女性として考えることが沢山ありました」「図書館の立ち合いを行い、今まで知らなかったことを知ることができた。先住民など様々なことを知り、自分が興味を持つきっかけになった」という意見が上がった。こうした意見から、イベントが学生の知的好奇心を刺激し、知識となっていったことがわかる。

質問6では、イベントにスタッフとして参加することで、ウォント盛ゼミ参加の4年生から「いろんな人が北米のマイノリティ女性に興味を持ってくれて嬉しかった」「自分が想像した以上に多くの方が来られました。参加できてよかったです」と、イベントに多くの方が参加され、自分たちの学習成果を見て頂くことに対して、学生の晴れがましい気持ちが伺えるコメントが見られた。イベント準備中は、英語原本の翻訳などで学生から弱音も聞かれたが、本プロジェクトの目的の一つである、「教員主導の座学では経験できない積極的な学びを学生が経験し、困難なタスクをやりきることで、自らの成長を実感する」、という目標を学生は感じ取ってくれたと推察する。

図書展、シンポジウム、ワークショップには学生以外の方も参加いただき、アンケートで多くの肯定的な意見を頂いた。図書展に関しては、「しっかりとした展示でとても勉強になりました」（30代書店員）、「重い内容ではあったが、ためになった」（30代ITエンジニア）、といった意見があった。一方で、「内容とは別のことで恐れ入りますが、学生がずっと一カ所で立ち続けていらっしやると、展示を見るのに少々気まずい感じがいたします。部屋の外で声かけをされるとか、室内でウロウロしてみるとかしていただくと見やすいと思います」（30代大学図書館スタッフ）、「パネルの文字がもう少し大きい方が良かった」（50代大学非常勤講師）といった意見も見られた。今後もこうしたイベントを継続したく考えているので、頂いた意見を参考に、よりよいイベントの在り方を考えていきたい。

以上、各種アンケートより、学生の学習意識・知識の高まりがエビデンスとして示された。また、学生以外の各種イベントの来場者の方からも、展示方法や学生の態度等、問題は指摘されたものの満足の高さが伺えた。そ

これはシンポジウムに参加された次の方のコメントから明確である。

学科の枠を超えたプロジェクトは今後も続けていただきたい。カナダから直接ネイティブな人を呼んだのは良かった。金がかかるが、大学の果たす役割の一つであると思う (70 代大学非常勤講師)。

初めての取り組みではあったが、こうした励ましの言葉を大切に、今後も学生が輝ける学習機会を作り続けていくことが、教員の役割であると再認識した。各種イベントに関する学生の学習エビデンス等を各種アンケートで考察したが、次は各ゼミでのイベント時・ならびにイベント後の成果と課題について述べていく。

イベント時・ならびにイベント後の各ゼミの成果と課題

〈ウォント盛ゼミ〉

ウォント盛ゼミは、1 年生 25 名、3 年生 21 名、4 年生 16 名から構成されている。プロジェクトの取り組みとして、日本人戦争花嫁について各学年で学び、英語原本の翻訳、論文のポスター作成等を行った。

制作した翻訳とポスターは図書展に展示し、4 年生が質疑応答した。このうち 2 名の 4 年生は、日本語日本文化学科原良枝先生の「視聴覚コミュニケーション演習 II」を受講している学生のアナウンス演習の取り組みの一つとして、インタビューを受けた。カメラを回しながらの撮影といった状況に緊張した様子ではあったが、学生たちは、図書展に関して自分たちの言葉で質問への受け答えを懸命に行っていた。

シンポジウムでは、3 年生 2 名が総合司会としてシンポジウムを取り仕切った。この 2 名の学生は自ら総合司会を志願し、シンポジウム 1 か月以上前から、台本を読み込み、司会の準備を周到にただけあり、当日は落ち着いて進行することができた。シンポジウムの基調講演を行ったキム・アンダーソン博士とのダイアログでは本ゼミ 3 年生 3 名、2 年生 1 名が登壇し、英語でカナダ先住民に関する質問を行った。彼女たちもまた、事前に英語の質問を自分たちで考え、発表準備をしていたので、当日は自信を持ってアンダーソン博士と交流することができた。日本人戦争花嫁に関する学生発表は、3 年生の学生 4 名が行った。この 4 名は日本人戦争花嫁について、能動的に自分たちの言葉で第三者に伝えることができた。本プロジェクトの大きな目的である、学生が主体的な学びから、より深く事象について理解する、という目的が達成できたと考えられる。

また、すべてのシンポジウム関連の取り組みは、複数の学生が共に行ったため、学生間での意思疎通、練習のための時間管理が要求されていた。通常の授業期間中にこうした管理を行うことは大変であったと考えられるが、当日の落ち着きをからもわかるように、学生たちは十分にシンポジウムをこなすための管理を行っており、本プロジェクトの目標である、マネジメントスキルの向上を果たした。

その他、イベントに向けてゼミの活動で特筆すべき点は、シンポジウムに登壇した学生だけでなく、裏方で多くの学生がシンポジウムを意欲的に支えた点である。各種イベントの裏方業務は、会場準備、会場撤収係、受付、教室内マイク係、ケータリング係等各ゼミで分担し、細かく設定されていた。会場準備や荷物運搬、イベント終了後のゴミ拾い等、大変な作業も学生たちは自主的に進んで行っていた。改めて学生の責任感の強さや、チームワークやリーダーシップを教員が介在しなくても自主的に形成・発揮できるといった、本学学生の強みを認識した。

一方、問題点としては、図書展とワークショップのイベントは当日業務を 3、4 年生が中心に行ったため、1 年生を主体的に取り込むことができなかった。シンポジウムでは発表等を聞くだけの、受動的な参加となった。すべての学生が、イベントに主体的に取り組めるよう、教員側の配慮がもっと必要であった。

〈岩崎ゼミ〉

岩崎ゼミは 1 年生ゼミ「基礎演習」の 13 名、3 年生ゼミ「制作演習」の 9 名が参加した。

3 グループに分かれた 1 年生は以下の児童書翻訳を完成させ、簡易製本としてまとめた。

①明治時代の稀覯本 *Nezumi no yomeiri* (ねずみのよめいり)

②先住民メイティの著名作家マリア・キャンベル (Maria Campbell) の *Little Badger and the Fire Spirit* (小さ

なアナグマと火の精)

- ③同じくキャンベル作 *People of the Buffalo: How the Plains Indians Lived* (バッファローの民－平原インディアンの暮らし)

特に②と③の翻訳は、北米先住民の文化を学ぶことでイベント最終日参加時の内容理解の一助とすべく行った。

①は今回のイベントと並行して開催された図書館貴重書展「I am a Book：ほんが本になるまでの物語」で、原本及び他の稀覯本と並んで展示された。②と③は別室で、キャンベル氏の他の著作と併せて展示された。この部屋には図書展開始日からプロジェクト最終日までの1週間、学生が交代で常駐し、来館者の案内と質問に応じた。イベント最終日前日には、森田学長の案内で訪れたアンダーソン博士、シャトランド氏、フレーザー氏と(英語で)言葉を交わすという、またとない機会を得る事が出来た。

3年生2グループは、イベント最終日に十分に内容を理解して臨むべく、カナダの先住民メイティ(女性)の歴史と文化に関する英語資料をまとめたパネルを2枚ずつ、計4枚作成した。これらのパネルは、上記の1年生の成果物②③と共に展示された。

3年生は、イベント最終日のシンポジウムの運営にも携わった。1名が総合司会を務め、3名がアンダーソン博士との英語を用いたダイアログの登壇者として、英語でカナダ先住民に関する対話を行った。他の学生も、会場設営、受付や茶菓提供を行った。

シンポジウム後学生たちは本学スタジオに移動し、シャトランド氏による先住民メイティの伝統的舞踊ジグ・ダンスのワークショップに参加した。シャトランド氏を中心に円形に並んだ岩崎ゼミの1,3年生22名、来学者、アンダーソン氏らは、フィドルの音に合わせてシャトランド氏が踊るダンスを珍しげに鑑賞した後、氏の導きの下皆が手に手を取って、生まれて初めて体験するダンスを最初はおそおそと、最後は大いに楽しみながら踊った。

学生たちはこれらのイベント後、日常では得られない知見に英語で触れられた喜びを語っていた。このような機会を体験した学生たちには、今後羞恥心や及び腰を克服し、積極的に英語でコミュニケーションを試みてほしいと願う。

〈木下ゼミ〉

上記のシンポジウム準備の中間報告の場として企画した岩崎・木下合同ゼミ(2019年7月11日木曜日4限)を取り上げ、学生の学習成果を把握し、本プロジェクトのキーワードである「学生主体」のアカデミックについて検討する。

授業の進め方について

「プレゼン大会」と称し、3年生14名の学生(岩崎ゼミ10名、木下ゼミ4名)が参加した。各ゼミ2名か3名のペアの3グループに分かれ、一方のペアが報告、他方のペアが聞き手となり、プレゼン5分、質疑応答5分として、全員が他のグループの報告を聞くように順次席を移動し、報告は各グループが4回担当した。その間、聞き手はタスクシートに記入した。加えて、参加者全員に対して授業後アンケートを実施した。

岩崎ゼミは、エンパワーメントが自覚的に表現された資料や文献(英文)を日本語に翻訳、要約して伝える活動であり、木下ゼミは、エンパワーメントに与する活動に参画し、その意義や内容、結果をフランス語文の日本語訳を含めてまとめる作業である。報告方法は10月26日に開催される国際シンポジウムおよび図書展に合わせ



写真1 岩崎ゼミ学生の報告方法



写真2 木下ゼミ学生の報告方法

た形式とし、岩崎ゼミはパネルを構成する資料を紙媒体で提示し、木下ゼミは国際シンポジウムの成果報告で使用するツールのパワーポイントを使った。

2つのアンケートとタスクシート

分析に用いるのは、4月に実施した表1の事前アンケート(回答数14名中14名)、今回の合同ゼミ実施後アンケート(回答数14名中10名)とタスクシートの記述である。

北米に住む人々に関するイメージは食(「ジャンクフードを食べる」,「日本より食べ物のサイズが大きい」),衣類(「薄着」,「厚着」),性格(「明るい」,「自由」,「前向き」,「元気」,「温厚」,「フレンドリー」,「オープン」),ライフスタイル(「ガレッジセールが好き」,「ラフに生きている」),多様性に関する内容(「いろんな文化」,「色んな人種」)を中心に、「政治」や「貧富の差」といった社会構造、自然や言語に関する内容(「自然が広大」,「英語」)や自分が対象に対してもつ評価(「カッコいい」,「憧れ」)を示していた。

マイノリティに対する理解では半数が知っていると答え、説明している(「マジョリティという、いわゆる普通の辺り前のことではなく、少数派のこと」,「社会的に人数が少なく、弱い立場にある人」,「自分のいきている社会の中で少数派に属している人々」)。

エンパワーメントについては、知っているものはいなかった。

北米先住民について、14名中4名が知っており、その内容は英語表記方法、地域に関する内容に限定された。

次に、授業後アンケートをみる。質問は、「1. 合同ゼミに参加して満足しましたか」「2.1の理由を教えてください」「3. 発表するにあたって大変だったことは何ですか」「4. 合同ゼミで他の学生の発表を聞き、「自分の作業」についてどのように感じましたか」「5. 相手からもらった質問やコメントで嬉しかった/参考になった内容を教えてください」および、その他メモの6項目である。

質問1の理由として、学生たちは、自分の報告内容に関する自分自身の知識に触れ(「説明できた」,「少しごたついてしまったけど聞かれたことに対して答えることができたから」,「自分たちの調べた内容を深く理解できておらず、説明するのが困難であった」),知識と技能を向上させる必要性を質問5で述べている(「細かなところまで説明できるようになるべきだ」,「曲はどんなのか?という質問で、たしかに楽譜を見ただけではわからないので、言葉できちんと説明できるように、文章にしようと思いました」)。

加えて、訳語に満足するだけでなく、その背景に関わる内容など、聞き手の観点を手がかりに、具体的に調べておくべき内容があることに気づいていく様子が見られる(「思いもよらない質問がきたこと」,「細かいところまで説明できなかつたところ」,「何も知らない違うゼミの人に説明を行うことで新しい問題点があった」,「英訳だけでなく、知識も合わせて調べる必要があると感じた。調べ物が少し足りていなかったと思った」)。こうして、学生たちは自分たちの制作物や活動の内容を相手に理解してもらう方法を検討し始め、自分もつ知識の限界と必要性を客観化し、今後の具体的な課題にたどり着いていく。

こうして理解を深めたいという思いが意識化されたことが分かったところで、タスクシートを通して、その過程にある授業中の学生たちの様子を振り返る。

タスクシートには、報告側の「研究・作業目的」「問題意識」「キーワード」と「その説明」「報告からわかったこと」「相手へのコメント」の6つの項目を記入することになっている。

まず、事前アンケート(質問3)で全員が知らないと答えた「エンパワーメント」について、半数がキーワードとして認識でき、説明を加えることができた。「一方的に助けるのではなく」,「差別や批判された人たちが」,「押し付けられたイメージをとりはらう」といった自分に「内在する力」に共感や連帯といった肯定的な力でもって「互いに協力して」働きかけることを理解したことに加え、エンパワーメントの一連の過程のなかで参加者が「リラックスして」,「楽しい」ワークショップを実施したと述べている。それは、エンパワーメントが安心した環境の中で育まれるのだという体験となっている。また、学生たちは一方的な情報のやり取りよりも「質問したら詳しくはなしてくれたので」理解できた、という応答的な関わりのもと知識を深めている様子であったことが分かる。

次に、事前アンケートの質問1,2,4に関わる理解の深化として分類される「メイティ」や「先住民」に関する報告について、キーワードとして1名を除き全員が記入し、その内容説明について2名を除き全員が答えている。

エンパワーメントのプロセスにみられる表現の様態としてダンスや刺繍を捉えることは容易ではないが、ダンスや刺繍といった美しさに注意がひきつけられ、授業前アンケートにあった「元気」「陽気」「自由」といった楽観的なイメージを関連づけたダンスの内容や刺繍方法の内容に限定されると考えたが、歴史的背景に関する学生によるメモ書きや「メイティの方も苦労している」といった回答のように、抑圧された状況下での対象者の経験を知ることで、表現の意義に関わる知識が拓かれつつあることが分かる。

一方、それぞれのテーマを用いて、研究の出発点である「問い」に対する学生たちの理解を質問1と2で聞いた。学生たちの多くの目的は、対象を知ることと活動を遂行すること（「メイティを知ること」、「新たな定義をつくろう」など）であったが、テーマの背景やそのテーマ扱うことの意義をめぐる問題提起を把握していたものが4つあった。

以上のアンケートおよびタスクシートをみると、学生間では、教える・教えられるという立場を入れ替えながらも理解を深めようとする相互の働きかけがみられている。研究作法（問題提起の必要性）に関しては、知識を個別かつ断片的に習得したとしても、教室という集団内でも相互に応答的な対応をきっかけに自分の意見を形成していく可能性がみられる。

〈図書館〉

甲南女子大学図書館には2つの展示室があり、毎年ここで本学所蔵の貴重書を一般に公開展示している。このうちの一室を本プロジェクトに提供し、もう一室では例年通り図書館主催の貴重書展を同時開催することで、来場者数増を狙った。（図書館貴重書展は前年比29% up）

図書館にある拡大印刷機を使ったパネル作成

プロジェクト図書展では、学生の研究成果をポスター（パネル）で発表していた。このパネルは図書館にある拡大印刷機で印刷された。ポスター作成を通して学生のICTメディアリテラシー能力の向上だけでなく、教職協働で取り組んだことは図書館職員としても大きな経験となった。

プロジェクト図書展とリンクさせた図書館貴重書展

同時開催を意識し、両展示をつなぐ仕掛けを準備した。プロジェクト図書展で展示される『日本人戦争花嫁』から、本学所蔵の貴重書で、婚礼に関係のあるものを選び、縮緬本『ねずみのよめいり』（英語版）を展示することにした。（縮緬本は明治時代に海外へ日本文化を紹介する役割も担っていた。）また、本プロジェクトに参加している学生に物語を日本語に翻訳してもらい、図書館貴重書展の補助資料として活用した。

プロジェクト図書展の発展

プロジェクト図書展はそれ自体が他の授業コンテンツとして二次活用がされた。「視聴覚コミュニケーション実習」という授業では、他学科の学生による展示の紹介、インタビュー、映像レポートの素材として利用された。単なる展示で終わるのではなく、そこから次の教育へと発展していた。

知の交差点としての図書館

図書館自体が「ラーニング・コモンズ＝学びの共有地」であることを再認識した。また大学における図書館が「人々の行きかう交差点の中心点」に物理的にも精神的にも位置づけられるよう、努力していければという感慨を抱いた。



The Mouse's Wedding. Kobunsha 1888（甲南女子大学図書館所蔵）

ま と め

本報告では、イベント時と、イベント後の成果と課題について、量的分析ならびに、教職員の所見を述べた。冒頭でも述べたように、各種イベントには多くの方が足を運んでくださり、肯定的なフィードバックを頂いた。アンケートの量的分析の結果も、学生の理解度の高まりが見られ、学習プロジェクトとして有意義であることがわかった。一方で、各ゼミの検証では課題も浮かび上がった。

ウォント盛ゼミは、イベント当日の取り組みは3、4年生が中心であったため、1年生が主体的に取り組める機会を十分に作れなかった、という課題が残った。

岩崎1年生ゼミについても、ウォント盛ゼミと同様にイベント当日、特にシンポジウム部分を3年生ゼミ主体で行ったため、この間1年生は単なる観覧者の立場となって主体的に参加することができなかった。今後は、後半のワークショップのようにどちらの学年も能動的に参加できるような仕組みをつくるのが、課題として残された。

岩崎・木下合同ゼミの活動では、授業前アンケートと授業後アンケートを比較し、知識獲得の成果を得ていることが分かった。さらに、授業中のタスクシートを合わせてみると、学習成果は、前後のアンケートからは分からない、学生同士が集団内でともに主体性を育む方法から生じている。この教室内で獲得された「ともに形成する主体性」が教育的効果としてキャンパスライフに緩やかに広がる土壌を開拓する役割は、これまで教える立場としてふるまってきた教職員である。したがって、この「学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント創出プロジェクト」によって新しいコミュニケーションが問われるのは「学生以外の私たち」である可能性が高く、この主体性といかにかかわるのかが課題であろう。

以上、諸課題はあったものの、学生のアンケートにあった北米先住民や写真戦争花嫁、フランスの女性を対象にしたエンパワーメントに関する報告について「多くの人に知ってもらえて良かった」という学生コメントが示すように、学生が今まで知らなかった事象を知り、それを自分たちの言葉で第三者に伝えるためのイベントに主体的に取り組め、学びを深められたことは、大きな教育的効果であったろう。また各種イベント実施のために、多くの学科と部署に横断的に協力いただいた点も、特筆すべき点である。本プロジェクトに関わったプロジェクトメンバーの希望として、こうした学科・組織横断型の学びの取り組みを今後も続け、本学学生の学ぶ力の向上に貢献していきたい。

参考文献

- 浅井晃、『カナダ先住民の世界—インディアン・イヌイット・メティスを知る』、彩流社、2004年
- 岩間暁子、ユ・ヒョジョン編著、『マイノリティとは何か』、ミネルヴァ書房、2007年
- ウォント盛香織、岩崎佳孝、木下裕美子、「学生主体による学科・組織横断型アカデミック・イベント創出プロジェクトの成果と課題(1)」、『甲南女子大学紀要』56巻、pp.1-7、2020年
- 木村和男編、『新版 世界各国史23 カナダ史』、山川出版社、1999年
- 京都外国語大学、『文明開化期のちりめん本と浮世絵』、<http://www.kufs.ac.jp/toshokan/b:ibl/bibl176/pdf/17613.pdf> (2019年10月11日閲覧)
- 富田虎男、スチュアート ヘンリ編、『講座 世界の先住民族—ファースト・ピープルの現在—07 北米』、明石書店、2005年
- 細川道久編著、『エリア・スタディーズ 156〈ヒストリー〉カナダの歴史を知るための50章』、明石書店、2017年
- Barkwell, Lawrence, Leah M. Dorion, and Audreen Hourie, eds. *Metis Legacy II*. Saskatoon: Gabriel Dumont Institution and Pemican Publications, 2006.
- Canadian Geographic. *Indigenous Peoples Atlas of Canada: First Nations*. Ottawa: The Royal Canadian Geographic Society, 2018.
- . *Indigenous Peoples Atlas of Canada: Inuit*. Ottawa: The Royal Canadian Geographic Society, 2018.
- . *Indigenous Peoples Atlas of Canada: Métis*. Ottawa: The Royal Canadian Geographic Society, 2018.
- Campbell, Maria. *Little Badger and the Fire Spirit*. Toronto: McClelland & Stewart, 1980.
- . *People of the Buffalo: How the Plains Indians Lived*. Vancouver: Douglas and McIntyre, 2013.